

名古屋大学

NUA
Nagoya University Archives

大学史資料室ニュース

Nagoya University Archives News 第14号

目次

Contents

九州大学大学史料室の現状・今後	2
留学生と名古屋大学 史林遍歴(7)	4
資料室だより	6
資料室日誌(抄)	8



覚王山日泰寺



現在の揚輝荘

(本文4~5ページ参照)

<http://nua.jimu.nagoya-u.ac.jp/>

九州大学大学史料室の現状・今後

九州大学大学史料室副室長 新谷 恭明

大学の独立法人化が目前に迫ってきた。いよいよ大学アーカイブの重要性は高まってきたと考えていいと思う。そういう中で九州大学大学史料室の現在を紹介することで大学アーカイブセクションがこれから進むべき道について手がかりを提供できれば幸いである。

1) 大学文書館設置準備委員会

現在、九大では大学文書館設置準備委員会が設立されている。これは2001年に石炭研究センターの将来計画を踏まえた大学文書（モンジョ）館構想が持ち上がり、設置されたものである。この設置準備委員会は当時の副学長が委員長になり、石炭研のセンター長、大学史料室長も含む構成となり、少なくとも大学史料と石炭研収蔵史料をはじめ学内に散在する記録史料類を一括して収集・保存・管理する機関を構想し、九州大学アーカイブとして概算要求を行おうということになった。アーカイブというカタカナ名称を選択したのは文書館をブンショカンと呼ぶかモンジョカンと呼ぶかの一つの妥協点でもあった。しかし、文部科学省の見解は大学アーカイブの必要性は認めるが、九州大学に認めればすべての国立大学に作らなくてはならなくなるというものであった。ここで頓挫したのは残念なことではあったが、将来的には希望を持つことができた。それは大学史料室が九州大学において必要不可欠であることが合意されたことである。現段階では独立法人化を控え概算要求は様子見の状態であるが、九州大学アーカイブは九州大学が自身の手で設立維持すべき機関として位置づけられたことはまちがいない。

2) 大学史料室の位置づけ

ところで私は2002年4月から大学史料室の室長から副室長へと降格した。人間、殊に年功序列の公務員社会にあって降格というのはなかなかできる体験ではない。別に不始末をしたというわけではない。史料室の位置づけが変わったのである。

九州大学では全学的な運営組織の見直しを行った。要は総長のリーダーシップを強化するという路線の中で3人の副学長と数名の総長特別補佐を介して重要な

委員会を直轄するというものである。それまでは大学史料室を管轄する史料収集・保存委員会は独立した全学委員会であった。だから史料室は専門家集団としてそれなりに気ままな活動をするのができたし、委員会は全部局から委員が出ていたために各部局とのつながりはあった。



しかし、総長とのラインからは外れていた。大学史料室の意見も提案も要求も執行部に届くには委員長＝室長の直訴やいろいろな機会（＝振替予算の要求、運用定員の要求、P & Pのような研究費のヒアリング等々）でのパフォーマンスに制限されていた。歴史的職人肌の人間ならば史料が集まってくればそれによしとしたかもしれない。しかし、大学史料室がその機能をじゅうぶんに発揮するには大学の中核に位置していることが必要であった。私たちはかつて「大学の自己確認・自己評価の具体的な場を大学自身が持つということである」（『九州大学史料の収集・保管について 九州大学史料室設置の提言』1991.4（以下『提言』）と略す）と大学アーカイブの目的を規定した。大学史料室は歴史研究の機関ではなく大学経営の中核にあるべきものと位置づけていたのだ。実際、副学長が収集・保存委員長と史料室長を兼務するということは大学史料室が図書館と同等の施設だということになる。

昨年12月の京都大学での第2回大学アーカイブズに関する研究会には有川節夫副学長が室長として参加された。たいへんありがたいことだと思っているし、大学アーカイブの重要性について九大のトップが直接全国の情報に触れていただいたことは実に有意義であった。私は降格がこんなに愉快なものであるかと快哉を叫んだ次第である。

3) 『大学とは何か』

当初から大学史料室の活動は「教職員・学生及び卒業生の大学に対する一体感（identity）を形成する（前掲『提言』）」と私たちは考えていたが、実際に学生の様

子などを見ているともっと identity の形成に積極的にかかわるべきだと考えるようになった。問い質してみると近年の学生たちは偏差値世代であるにもかかわらず、意外に大学に関する情報を持っていないようなのである。九州大学が旧帝国大学であったということや六本松地区がかつては旧制福岡高等学校であったことなどを知らずに単に偏差値でどここの下だとか上だとかという自覚のしかたなのである。私たちは、きちんと九州大学の歴史であるとか、大学で学ぶとはどういう意味があるのかということを生徒たちに伝える必要があることを痛感して「九州大学の歴史」という自校史の授業を始め、さらに「低年次教育における九州大学史カリキュラム開発に関する研究」で九大内の研究拠点プロジェクト経費を獲得して「大学とは何か」という合同講義を試行授業として実施した。そしてこのプロジェクトは第一回総長賞を受賞した。さらにこの講義の成果は『大学とは何か』（海鳥社）という書物として市販することができた。市販することによって大学を問い直すという根本的な課題を大学を志す若者や、大学に生徒を送ろうとする人々、さらに大学に何かを期待しようとしている人々にぶつけていく道が開けたと考えている。ベストセラーにしたいのだが...

大学アーカイブは史料の収集・保存のみならず如何

に活用をしていくか考えて行くべきであろうし、なかでも教育・啓発はこれからの重要な領域となっていくであろう。

4) オーラルヒストリー

教育で学内経費を獲得したことに味をしめて大学改革に影響を持った人物の政策決定にかかわる暗黙知を記録として残すべくいわゆるオーラル・ヒストリーの収集という計画を立て、学内研究費の申請を企てた。そしてかなり高い評価は得たらしいのだが、あまりに九大の現在にかかわりすぎているということからか経費の獲得には至らなかった。幸い、この事業は科研費によって進められることになり、現在、九大の改革、移転などの担当であった前副学長の聞き取りを行っている。

これからの大学経営は先達と経営の暗黙知を共有化していくことが必要になってくると考える。歴史とはそういう役割を果たしてきたものでもあるが、多くは後の人間の歴史観によって編集されるものであった。そうではなくて、政策判断をした人物の暗黙知がまだ暖かいうちに記録しておくことで、後世の大学経営に供することができると考えられる。その意味でオーラルヒストリーは新たな大学アーカイブの創り出す史料となるであろう。



留学生と名古屋大学 史林遍歴(7)

1. 名古屋大学の留学生

現在名古屋大学には、1,000人を越える外国人留学生が在籍しています。学内には留学生センターがあり留学生への対応をおこなっています。また留学生会館・インターナショナルレジデンス・国際留学生会館などの宿泊施設も整っています。留学生にとって十分とはまだいえないかもしれませんが、各施設はそれなりの努力をされていると思います。

2. 戦前の名古屋の留学生

ところで、名古屋には戦前からアジアなどから留学生が多数訪れており、第八高等学校や愛知医科大学(いずれも名古屋大学の前身校です)などで学んでいました。しかし、十五年戦争のさなか、日本人学生相手の下宿でさえ十分にはなかった当時、留学生に下宿を提供するところはほとんどありませんでした。そのような中、初代松坂屋社長伊藤次郎左衛門祐民氏は1936年、名古屋千種区の覚王山日泰寺(当時は日暹寺)東にあった自己の別邸揚輝荘敷地内の建物施設に、タイ人留学生3名を受け入れました(表紙写真参照)。

伊藤氏は、ビルマ(現ミャンマー)独立の志士オッタマ僧正と懇意の仲にあり、すでに1913年にはビルマ人の子ども6人をうけいれていました。そして社長引退後、インド巡拝旅行の途中タイに立ち寄った際、当時の矢田部タイ公使から日泰寺がある名古屋でタイ人留学生を受け入れるよう説得されました。そして帰国後、日本とタイの友好事業の一環として名古屋日暹協会(のち名古屋日泰協会に改称)を設立、留学生の受け入れをはじめたのでした。

くしくも前述したように、揚輝荘のすぐ近くに日泰寺はありました。毎月21日弘法大師の命日には露店で賑わうこの寺院は、釈迦の真骨といわれる骨をタイから納めるために、1904年名古屋に建立された寺院であることから、その寺院名が付けられたように、タイと深い縁がありました。伊藤氏のタイ留学生招聘に日泰寺が間接的にかかわっていたこととなります。

衆善寮と名付けられたこの留学生寮はその後戦火が激しくなるとモンゴル・中国・朝鮮民主主義人民共和国(当時は日本占領下)の留学生も受け入れ、また日本人学生も入寮するようになりました。日本とアジア



戦前の揚輝荘内と衆善寮の留学生(三上坦氏提供)

との関係が悪化する中であっても、宮城遙拝もなく、スプーン・フォークも用意されており、自由で友好的な雰囲気は保たれていました。これは当時の寮長三上孝基氏の人柄・尽力によるものといわれています。しかし1945年3月の名古屋大空襲によりその大半が焼失し、この寮も自然と廃寮となったようです。

また、病氣治療に密かに来名していた汪兆銘（この戦争時代に親日派であった南京国民政府主席）を、一時この揚輝荘で療養させたいという打診もあったといわれています。なお揚輝荘について詳しくは、上坂冬子著『揚輝荘、アジアに開いた窓』（講談社、1998年）をご覧ください。

3 戦後の留学生と名古屋大学

戦後しばらくの間、1960年頃までの留学生については、まだよく把握できていません（この間のことはほとんど断片的にしかわかっておりません。何か資料等ご存じの方があれば、大学史資料室へご連絡下さい）。ただ1959年になると、当時も発展途上国の外国人留学生を受け入れる下宿が、まだ県内にほとんどなかったため、名古屋大学では牧島久雄学生部次長ほか学生部職員が、自宅をタイ人留学生の下宿として提供しました。これきっかけに、留学生を支援する活動組織の必要性が高まり、1961年に愛知国際学友会（のち留学生会に改称）とともに同後援会が組織されました。発起人には戦前から留学生支援をおこなっていた前述の三上氏らも名を連ねていました。名古屋日泰協会や三上氏らが戦後もおそらく留学生についてなにかの活動を継続しておこなっており、それを牧島氏らもよくご存じであったのでしょう。当時この会の発足もあって、

愛知は留学生に対する施策が他の地域に比べ進んでいるともいわれていたようでした。これら後援会は現在も続いており、留学生会の自主性を尊重しながら、歓送迎会、見学会、旅行、経済援助、各種相談などをおこない、留学生との相互理解と協力親善に努めています。

4 タイと名古屋大学

ところで、統計データ上では現在のところ、名古屋大学の留学生は、前述した1959年から確認できます。その1959年は前述したようにタイからの留学生で始まっています。もちろんそれ以前から留学生いたとは思いますが、それにしても戦前からの名古屋とタイとの交流の歴史を感じさせるデータ結果ではないでしょうか。ともあれ名古屋とタイの交流は、日泰寺とともに、名古屋大学の歴史に深く関わっています。

（神谷 智）

お知らせ

上記留学生についてのほか、名古屋大学の国際交流については、2002年6月21～25日『名古屋大学の軌跡 国際社会との知的交流』と題して名古屋大学国際フォーラム特別展示を開催して、ご覧いただく機会をつくりました（先のニュース第13号で既報済みです）。見逃した方も多くおられると存じますが、この展示については小冊子およびCDを3月末に発刊する予定です。ご入用の方がございましたら、本ニュース最終頁の問い合わせ先まで mail・FAX・郵便でお申し込み下さい。

お詫びと訂正

先号の名古屋大学大学史資料室ニュース第13号に表記の誤りがありました。2頁左1行目「M-usium」を「M-useum」に、5頁右17行目「豊田講堂前の芝生あたり」を「工学部5号館あたりにあった運動場」に、9頁見出し「国際社会と知的交流」を「国際社会との知的交流」に、それぞれ訂正させていただきます。慎んでお詫び申し上げます。

資料室だより

第1回大学史資料室 ワークショップ「アーカイブズのすすめ」 小川克郎氏講演「アーカイブズの意義と国による 知的基盤整備の動向」を開催しました。

大学史資料室では第1回ワークショップ「アーカイブズのすすめ」として、小川克郎名古屋大学名誉教授に「アーカイブズの意義と国による知的基盤整備の動向」と題して、講演をしていただきました。小川先生には先号の資料室ニュースで「Archivesの意義」ご寄稿をいただきましたが、今回はこれにもとに、さらに国の、とくに経済産業省における知的基盤整備の動きについてもご説明いただきました。

内容は、前者のアーカイブズの意義については、アーカイブズは検索機能付き記録保管庫にもう少し広い意味を付加したもので、学問の継承とパブリックサービスの2つの意義を持つことを小川先生のご体験を交えていただきながらご説明下さいました。後者について知的基盤整備の実現のためには、検索機能などがついてデータが使える形になっていなければならないこと、またパブリックサービスへの貢献度を評価する必要性などを指摘され、そのためにもアーカイブズの果たす役割は、「名古屋大学大学史資料室」というような名前では収まりきれないくらいに非常に大きいものであると言及されました。

参加者は約30名余で、講演後の質疑討論も、予定時間より30分以上も長引くほど、活発に行われました。なお本講演記録は『名古屋大学史紀要第11号』に掲載されます。3月末刊行予定ですので、ご入用の方がございましたら、本ニュース最終頁の問い合わせ先まで、mail・FAX・郵便でお申し込み下さい。



名古屋大学 大学史資料室 公開シンポジウム

「開かれた大学とこれからの文書資料管理・情報公開」

の報告書ができました。

大学史資料室では、2001年9月20日(休)午後、名古屋大学東山キャンパスにあるシンポジオンホールにおいて、公開シンポジウム「『開かれた大学』とこれからの文書資料管理・情報公開」を開催しました。当日参加者数は281名にのぼり、事前に用意した約250席が開会時点で満席となり、立ち見状態の参加者が出るほどの盛況なシンポジウムとなりました。参加者層も情報公開等の行政事務担当者、歴史資料保存機関等関係者、一般市民、本学・他大学教員、本学・他大学学生など、社会各層から今回のシンポジウムで取り上げたテーマに対して強い関心が存在することがわかりました。大学アーカイブズとしての機能を目指す大学史資料室では、今後も「開かれた大学」としての本学の取り組みを支援するため、展示活動などを通じた情報発信を積極的に展開していくことを予定しています。

報告書の概要は下記の通りです。

はじめに

第1部 講演および全体討議

【講演1】

「情報公開社会におけるこれからの文書資料管理」 ...国際資料研究所代表 小川千代子氏

【講演2】

「大学文書館(大学アーカイブス) その意義と新しい役割」 ...桜美林大学大学院教授 寺崎 昌男氏

【全体討議】

コメント「名古屋市の情報公開」 ...名古屋市市民経済局市政情報課 近藤世津子氏

「博物館における歴史資料の保存と公開」 ...豊橋市美術博物館 和田 実氏

第2部 配布資料等

第3部 アンケート集計結果

報告書は残部が多少あります。ご入用の方がございましたら、本ニュース最終頁の問い合わせ先まで mail・FAX・郵便でお申し込み下さい。



資料室日誌(抄)

- 8月9日 名大院教育発達科学研究科教員より、資料受贈。
- 8月22日 山口室員、東京都出張(立正大学、国立国会図書館、24日まで)。
- 8月31日 名大博物館特別展(大学史資料室共催)『名帝大けふ誕生 - 初代総長洪澤元治とその時代 -』終了。
- 9月6日 瓜谷郁三名大名誉教授より、資料受贈。
- 10月2日 大橋郁夫氏、資料寄贈のため来室。
- 10月7日 全学教養科目「情報公開と文書資料 - 文書の世界を歩く -」授業開始。
韓国海洋大学校事務員3名、資料室見学のため来室。
- 10月11日 名大生協職員、卒業・入学アルバム寄贈のため来室。
- 10月16日 山口室員、札幌市出張(北海道大学、全国大学史資料協議会出席、18日まで)。
名大施設計画推進室教員より、資料受贈。
- 10月17日 学内の各部局へ、印刷物刊行物提供依頼。
- 10月22日 朝日新聞記者、名大の自校史教育につき取材のため来室。翌日夕刊に掲載。
- 10月23日 名大博物館教員、資料撮影のため来室。
- 11月9日 神谷室員、横浜市出張(神奈川大学、11日まで)。
- 11月12日 名大生協職員、卒業・入学アルバム掲載記事打ち合わせのため来室。
- 11月30日 『名古屋大学大学史資料室ニュース』第13号刊行。
- 12月7日 神谷、山口室員、京都市出張(京都大学、第2回大学アーカイブズに関する研究会出席)。
- 12月16日 国立史料館員、資料室見学のため来室。
- 12月19日 水田洋名大名誉教授より、資料受贈。
- 12月20日 名大名誉教授、名大教員、芦田淳資料照会につき来室。
- 12月21日 第1回名古屋大学大学史資料室ワークショップ『アーカイブズのすすめ』開催。
鈴木光保氏より、資料受贈。
- 12月23日 神谷室員、福井県出張(24日まで)。
- 12月25日 水田洋名大名誉教授より、資料受贈。
- 1月7日 九州大学教員、資料室見学のため来室。
- 1月22日 紀要編集専門委員会(第4回)開催。

『名大トピックス』に「ちょっと名大史」を連載しています。

昨年5月から、大学広報誌『名大トピックス』の裏表紙に、「ちょっと名大史」という表題の記事を連載しています。これは、名古屋大学の歴史に関係のある学内外の建物施設や場所(旧跡)あるいは記念物(記念碑・記念樹など)・記念建物などを、名古屋大学の歴史を交えて紹介していくものです。これまでは、おもに名古屋大学の前身校(医学部前身校・第八高等学校・名古屋高等商業学校・岡崎高等師範学校)について紹介してきましたが、今後は新制大学以降の各部局に関わるものについても書いていきたいと思っております。ぜひご一読下さい。

なお、名古屋大学の歴史に関する建物施設・場所(旧跡)・記念碑・記念物に関する情報を集めております。ご存じのかたがいらっしゃいましたら、

大学史資料室(電話&FAX:052-789-2046、e-mail:nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp)

へご連絡ください。

名古屋大学大学史資料室ニュース 第14号
Nagoya University Archives News No. 14

名古屋大学大学史資料室

室長 加藤 鉦治(教授・併任)
専任室員 神谷 智(助手)
山口 拓史(助手)
事務員 増田 よしみ

発行日 2003年3月31日(年2回刊)

編集
発行

名古屋大学大学史資料室

名古屋市中区千種区不老町〒464-8601

電話&FAX:(052)789-2046

E-mail:nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp

印刷

株式会社荒川印刷

名古屋市中区千代田2-16-38

資料室日誌(抄)

- 8月9日 名大院教育発達科学研究科教員より、資料受贈。
- 8月22日 山口室員、東京都出張(立正大学、国立国会図書館、24日まで)。
- 8月31日 名大博物館特別展(大学史資料室共催)『名帝大けふ誕生 - 初代総長渋澤元治とその時代 -』終了。
- 9月6日 瓜谷郁三名大名誉教授より、資料受贈。
- 10月2日 大橋郁夫氏、資料寄贈のため来室。
- 10月7日 全学教養科目「情報公開と文書資料 - 文書の世界を歩く -」授業開始。
韓国海洋大学校事務員3名、資料室見学のため来室。
- 10月11日 名大生協職員、卒業・入学アルバム寄贈のため来室。
- 10月16日 山口室員、札幌市出張(北海道大学、全国大学史資料協議会出席、18日まで)。
名大施設計画推進室教員より、資料受贈。
- 10月17日 学内の各部局へ、印刷物刊行物提供依頼。
- 10月22日 朝日新聞記者、名大の自校史教育につき取材のため来室。翌日夕刊に掲載。
- 10月23日 名大博物館教員、資料撮影のため来室。
- 11月9日 神谷室員、横浜市出張(神奈川大学、11日まで)。
- 11月12日 名大生協職員、卒業・入学アルバム掲載記事打ち合わせのため来室。
- 11月30日 『名古屋大学大学史資料室ニュース』第13号刊行。
- 12月7日 神谷、山口室員、京都市出張(京都大学、第2回大学アーカイヴズに関する研究会出席)。
- 12月16日 国立史料館員、資料室見学のため来室。
- 12月19日 水田洋名大名誉教授より、資料受贈。
- 12月20日 名大名誉教授、名大教員、芦田淳資料照会につき来室。
- 12月21日 第1回名古屋大学大学史資料室ワークショップ『アーカイブズのすすめ』開催。
鈴木光保氏より、資料受贈。
- 12月23日 神谷室員、福井県出張(24日まで)。
- 12月25日 水田洋名大名誉教授より、資料受贈。
- 1月7日 九州大学教員、資料室見学のため来室。
- 1月22日 紀要編集専門委員会(第4回)開催。

『名大トピックス』に「ちょっと名大史」を連載しています。

昨年5月から、大学広報誌『名大トピックス』の裏表紙に、「ちょっと名大史」という表題の記事を連載しています。これは、名古屋大学の歴史に関係のある学内外の建物施設や場所(旧跡)あるいは記念物(記念碑・記念樹など)・記念建物などを、名古屋大学の歴史を交えて紹介していくものです。これまでは、おもに名古屋大学の前身校(医学部前身校・第八高等学校・名古屋高等商業学校・岡崎高等師範学校)について紹介してきましたが、今後は新制大学以降の各部局に関わるものについても書いていきたいと思っております。ぜひご一読下さい。

なお、名古屋大学の歴史に関する建物施設・場所(旧跡)・記念碑・記念物に関する情報を集めております。ご存じのかたがいらっしゃいましたら、

大学史資料室(電話&FAX:052-789-2046、e-mail:nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp)
へご連絡ください。

名古屋大学大学史資料室ニュース 第14号
Nagoya University Archives News No. 14

名古屋大学大学史資料室
室長 加藤 証 治(教授・併任)
専任室員 神谷 智(助手)
山口 拓 史(助手)
事務員 増田 よしみ

発行日 2003年3月31日(年2回刊)
編集発行 名古屋大学大学史資料室
名古屋市中区千種区不老町〒464-8601
電話&FAX:(052)789-2046
E-mail:nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp
印刷 株式会社荒川印刷
名古屋市中区千代田 2-16-38